

メディア実践を通じた言語再活性化

—ハワイ語ラジオ番組カ・レオ・ハワイはどのような番組だったのか—

Language revitalization through a media practice

—What was the Hawaiian language radio program, *Ka Leo Hawai'i*, like?—

古川 敏明¹

¹大妻女子大学文学部

Toshiaki Furukawa¹

¹Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：マスメディア、ラジオ、ハワイ語、言語再活性化

Key words : Mass media, Radio, Hawaiian language, Language revitalization

抄録

本稿はアメリカ合衆国ハワイ州におけるラジオ番組カ・レオ・ハワイを分析対象としている。1970～80年代に放送された400を越える番組の録音に基づき、番組の全体像を描き出すことを目指した。カ・レオ・ハワイは、ハワイ先住民の言語文化の記録を通じてコミュニティの形成と維持を行うメディア実践であった。番組の特徴の1つはゲストであり、多くが年配のネイティブスピーカーであった。番組終了後は膨大な録音がデジタル化され、教育機関における電子メディア実践を通じて、現在でも引き続き言語の再活性化に貢献している。番組の録音が再活性化運動において貴重なのは、ハワイ語には組織的に収集され、これほどまとまった量の自然発話による音声資料がほとんど存在しないからである。また、年配の第一言語話者は高齢化が進み、現在の話者数はおそらく100人を切っており、新たに音声資料を生み出すことも容易ではない。

1. 導入

マイノリティ言語を再活性化するには、日常の会話や儀礼的な場面だけでなく、新しいドメインにも言語使用領域を拡大すべきとする議論がある¹⁾。新しいドメインにはテレビやラジオなどのマスメディアやインターネットでの言語使用が含まれる。ハワイ語は言語再活性化の成功例として言及されることがあるが、これは新聞やラジオなどの公共圏を形成するドメインにおいて言語が使用されてきたことと無関係ではない。ハワイ語の再活性化に大きな影響を与えてきた文化実践として、1970～1980年代に放送されたラジオ番組カ・レオ・ハワイがある。

本稿の目的は、「ハワイの声」という意味を持つカ・レオ・ハワイがどのような番組であったか明らかにすることであり、番組にまつわる情報の可視化を行い、全体像を描き出すことを目指す。

後述するように、放送終了後に番組の要約集が編纂されたり、番組の録音が貴重なリソースとしてハワイ大学の授業などで用いられてきたりした。しかし、著者が知る限り、こうした資料が研究目的で利用されたことはほとんどない。

また、本稿は番組の分析を通じ、特に1980年代より前のハワイ語再活性化の状態に光を当てることを目指す。ハワイ語再活性化運動について考えるとき、1984年のプーナナレオ（就学前の児童を対象とするハワイ語の没入教育機関）開始に注目しがちである。しかし、ハワイ語の再活性化の起点は1984年ではない。カ・レオ・ハワイは、言語の再活性化が80年代以前から始まっていたことを示しているのである。本稿のねらいは1984年前、特に1970年代の再活性化運動の一端を描き出すことであり、1960～70年代から始まりハワイアン・ルネッサンスと呼ばれる先住民文化の復興運

動の流れの中でハワイ語の再活性化を捉えたい。

ハワイ語の衰退と再活性化の歴史は、日本を含む世界の国や地域からの移民、観光産業、戦争の歴史とも絡み合い、複雑な様相を呈している。しかし、ハワイの歴史を論じることが本稿の目的ではないので、ここではハワイ語をとりまく状況に絞って簡潔に述べておく。ハワイ語はオーストロネシア語族のポリネシア諸語に属し、ハワイ諸島に根ざす言語である。18世紀後期におけるハワイと西洋の接触以降、ハワイ語はハワイ王国の国家語として用いられ、憲法、新聞、学校教育の言語として英語とともに用いられていた。しかし、次第に英語の影響が増し、ハワイ語は衰退の一端を辿っていく。1893年にはアメリカ人実業家とアメリカ軍の共謀により王国が転覆されて、翌年に共和国となり、1898年にはアメリカに併合されて準州となった。1959年にはアメリカの50番目の州となる。このように統治形態（王国、共和国、準州、州）が変わる中、ハワイ語は教育言語としての地位を失い、話者数は減少していった。その後、アメリカ本土における公民権運動から影響を受けた上述のハワイアン・ルネッサンスの流れの中で、1978年にはハワイ語は英語とともに州の公用語に定められた。こうして1980年代にハワイ語の没入教育が開始されたのである。消滅の危機に瀕していたハワイ語は先住民のアイデンティティの要として再活性化が進められていった。

現在、年配のネイティブスピーカー数は100人以下であると推測される一方、没入教育で高校まで教育を受けた新たなネイティブスピーカー数は数千に達している。また、ハワイ大学ではハワイ語を用いて博士号までの学位取得を目指すことも可能である。しかし、教育機関では教育言語として確立しつつある一方、日常生活における言語使用まで広く再活性化されたとはいえない。没入教育で教育を受けた話者たちが次世代にハワイ語を継承していけるかが見守られている状態にある。次節ではマイノリティ言語とメディアに関する先行研究を概観する。

2. 先行研究

2.1. マイノリティ言語とメディア

原^[1]は文化人類学的な試みとしてのメディア研究という枠組みについて論じている。文化人類学的アプローチを特徴づけるのは、研究者が持つ再

帰性である。こうした再帰的なアプローチの実例として、原^[1]はハワイのオキナワンを対象として、電子メディア実践を通じたコミュニティ形成と維持について報告している。

電子メディアの実践をネット時代の実践と捉え直した塚原・ハインリッヒ^[4]はドメイン、相互行為、公共圏といった社会言語学が用いてきた従来の概念はネット時代の言語使用においても分析ツールとして利用可能であると論じている。こうしたネット時代の新しい動きとして、杉田^[5]は複合メディア化するローカルラジオと奄美・琉球諸語について論じている。ラジオが他のメディアと連動することにより電子メディアの実践が複雑化し、ローカルラジオが局所的な地域のリスナーだけでなく、さまざまな地域のリスナーを獲得している現状がある。

2.2. ハワイ語とメディア

言語の多様性について論じた論考において、ハワイ語は言語再活性化の成功例として言及されている^[6]。ハワイ語が成功例とされているのは、主に学校における没入教育（イマージョン）で成果が出ているからである。こうした没入教育の現況について調査が行われてきたが^{[7][8]}、学校以外の領域におけるハワイ語使用については、新旧のメディアにおけるハワイ語使用を概観する報告^{[9][10]}があるものの、全体として研究が不足している。本稿は学校以外の言語使用領域としてマスメディアに着目し、特にハワイ語の再活性化に大きな役割を果たしていると考えられるラジオ番組を分析対象とすることで、言語再活性化とメディアをめぐる研究に貢献することを目指す。

マイノリティ言語は言語記述と政策の観点から研究が行われ、ハワイ語も両面で研究が進められてきた。言語を再活性化するには、文法書、辞書、テキストの構築が不可欠であるが、カ・レオ・ハワイは特にテキスト構築あるいは言語コーパスの蓄積と捉えられる。

また、カ・レオ・ハワイが目指したのは、ラジオというメディア実践を通じたコミュニティ形成と維持であった。番組は録音され、テープとして保存されていた。その後、放送内容の要約集が編纂され、録音のデジタル化、つまり、ハワイ語リソースの電子メディア化が行われた。このリソースは主に大学で利用されてきた。具体的には、学習

者たちは電子化された録音をリスニングやスピーキング活動に用いたり、文化的な情報を抽出したりするリソースとして利用しており、こうした活動は電子メディア実践の一例といえる。

21世紀に入ってから、ハワイ語の再活性化と関わりのあるラジオ番組が制作されている。オアフ島にあるハワイ大学ラジオ局KTUHではハワイアン音楽を扱う番組がハワイ語で放送され、ネットでも配信されることにより、地理的な制約に縛られることなく視聴できる。番組パーソナリティは番組で流した音楽を紹介するブログも開設し、ラジオを複合メディア化しているといえる。また、ハワイ島のKWXX局は常時、より現代的なハワイアン音楽を英語で放送し、ネット配信もしている。(KWXX以外にもハワイアン音楽をネット配信しているラジオ局は存在するが、ネット配信であっても地域的な制約を設けており、どこでも視聴できるわけではない。) このように、ハワイ語は特に音楽との関わりを通して、電子メディア実践によるコミュニティ形成と維持が継続されていることがわかる。

3. 研究方法

カ・レオ・ハワイは1972年から1988年まで約16年間、オアフ島ホノルルのラジオ局KCCN (1420 AM) で放送された。ラリー・カウアノエ・キムラが番組パーソナリティを務め、キムラを含むハワイ大学の学生団体ファイ・アロハ・アイナ・トゥアヒネ(トゥアヒネの大地を愛する集団)が番組制作を担当していた。当初は隔週放送だったが、後に毎週放送するようになり、400回以上放送された。

同番組はハワイ語の再活性化運動において大きな役割を果たしてきた。主に年配の話者をゲストに迎え、ホストであるキムラとさまざまな話をすることにより、言語と文化的知識の記述・記録を目指していた。番組中にはリスナーが電話をしてくることもあり、こうしたリスナーとキムラやゲストとの会話も記述・記録の一部となった。放送は録音され、全417回の放送回の総録音時間数は約500時間になる。番組終了から数年後には要約集が編纂された。録音は現在までにはほぼすべての放送回がデジタル化され、大学の授業などでリソースとして利用されている。

次節では、番組の要約集^{[11][12]}をデータとして

内容を分析することにより、カ・レオ・ハワイとは一体どのような番組だったのかという問いに答え、番組の全体像を描き出したい。

4. 分析

要約集では各放送回が1ページにまとめられ、データを整理するのに必要な基本的な情報(テープ番号、放送日、録音時間など)、インタビューア(主にキムラ)、主たる発話者(パーソナリティのキムラ、ゲストなど)、ゲスト一覧、電話をかけてきたリスナー一覧、番組内の会話に登場した話題といった項目が設けられている。

また、各発話者について、ネイティブスピーカーかそうでないかの区別、出生地、言語的影響を受けた場所が記載されている。最後の、言語的影響を受けた場所という項目については、単に出生地と区別されている場合もあれば、言語習得期を過ごした場所、高校や大学など教科としてハワイ語を学習した場所が挙げられている場合もある。

さらに、上記項目に加え、歌(songs)という項目が設けられ、番組中に生演奏されたり、レコードがかけられたりしたハワイアン音楽やハワイ語の詠唱(チャント)が一覧を構成している。音楽や詠唱は文化的知識の一部であり、番組が先住民言語文化の記録を目的としていたことがわかる。

たとえば、第1回目の放送を参照すると、テープ番号はHV24.1、放送日は1972年2月22日、録音時間は61分、インタビューアはラリー・カウアノエ・キムラとなっている。主たる話者とゲストはともにジョン・アルメイダで、ネイティブスピーカーと分類され、出生地はオアフ島パウオア、言語的影響を受けた場所はオアフ島パウオアとワイアナエとなっている。番組中の話題は、ミュージシャンであるアルメイダの楽曲(songs and music)となっている。

本節では以上のような要約集のデータを分析し、番組の全体像を把握することを目指す。まず、年別の放送回数の推移を示す。

4.1. 放送回数の推移

放送回数の推移を把握するため、年ごとに開始のテープ番号と終了のテープ番号を示す。たとえば、初年度の1972年はテープ番号1から20まで(HV24.1からHV24.20)、全20回放送されたことがわかる。要約集に収められたテープ番号は

417 までであるが、1988 年までの放送回の合計は 415 回となっている。これは、要約集に記録されていない 2 回分の放送回がちょうど年の変わり目（12 月か 1 月か）に放送されたと推測され、どちらの年か判断できないため分類から除外したからである。テープ番号にアルファベットが含まれているもの（e.g., 114A）は、録音が 2 つ以上のファイルに分かれている（e.g., 114A, 114B, [...] 141A, 141B）ことを示す。

表 1. 年別の放送回数

年	開始 (tape#)	終了 (tape#)	放送回数
1972	1	20	20
1973	21	50	30
1974	52	81B	30
1975	83	113	31
1976	114A	141B	28
1977	142A	168B	27
1978	169A	196B	28
1979	197A	222B	26
1980	223A	251B	29
1981	252A	275D	24
1982	276A	300	25
1983	301	327	27
1984	328	357	30
1985	358	380	23
1986	381	397	17
1987	398	413	16
1988	414	417	4

1972 年から 1985 年までは毎年 20～30 回放送されていた。初年度が 20 回で、それ以降は 20 回以上放送し、平均 27 回放送していた。1986 年から最後の 3 年間は 20 回を下回り、放送回が減ったように見える。最終年 1988 年は急減し、4 回（11 月と 12 月に 2 回ずつ）となっている。

ちなみに、上記の表は年別に放送回を整理したが、番組制作運営の主体であったグループ、フイ・アロハ・アイナ・トゥアヒネはハワイ大学の教員や学生が中心であり、番組は大学の学期中に

放送されていた。つまり、実際は Semester 単位（i.e., Fall Semester, Spring Semester）での運営だったと考えられる。秋学期（8-12 月）に放送され、休暇を挟み、春学期（1-5 月）の終わりまででひとまとまりであり、それ以降は長い休みを挟み、秋学期が始まる 8 月頃に再開されていた。

放送が急に終了したように見える理由として、長年にわたりゲストとして番組に貢献して来た話者が亡くなったことが、番組の継続を困難にした可能性が考えられる。続いて次節ではゲストの出生地を示す。

4.2. 出生地

出生地は番組冒頭でキムラが必ずゲストにする質問のひとつになっている。要約集には「主たる話者」と「ゲスト一覧」という関連した項目があるが、本稿では後者のゲスト一覧の最初に名前が掲載されている人物のデータを分析対象とした。こうした基準を設けたのは、「主たる話者」の項目は未入力の場合があること、番組中で誰が主に話していたかという判断には要約集の作成者による主観が含まれること、主たる話者とゲスト一覧の最初に名前がある人物は同じであることがあり、こうした人物が主たるゲスト（つまり、言語と文化の記録の対象者）であることが多いことを考慮したからである。

表 2. ゲストの出生地

出生地	放送回数	%
ニイハウ島	14	3.4
カウアイ島	22	5.3
オアフ島	125	30.0
マウイ島	40	9.6
ラナイ島	0	0.0
モロカイ島	15	3.6
カホオラヴェ島	0	0.0
ハワイ島	104	24.9
不明	76	18.2
アメリカ本土	13	3.1
その他	8	1.9

ゲストはほぼ全員がハワイ生まれである。ハワ

イ諸島の中では、オアフ島 (30%) とハワイ島 (24.9%) 生まれが突出していて、次に多いマウイ島 (9.6%) の2~3倍となっている。他は多い順にカウアイ島 (5.3%)、モロカイ島 (3.6%)、ニイハウ島 (3.4%) となり、ラナイ島とカホオラヴェ島生まれはいない。

ニイハウ島は私有地であり、ハワイ語を日常的に用いるコミュニティが存在するという意味において、特別な位置づけにあり、他の島のハワイ語とは異なる特徴を有していると語られることがある。たとえば、教科書では「私たち」は *kākou* (カーコウ) と表記されているが、ニイハウ島のハワイ語では *tātou* (タートウ) となるように、*k* と *t* の音の対立がある。ニイハウ島以外の島に在住する番組のリスナーは、カ・レオ・ハワイを通じて、方言差が際立つと語られるニイハウ島のハワイ語を耳にする機会を得たといえる。主要8島のハワイ語に方言差はあるとされるが、ハワイ語の変異研究はまだ未開拓の領域である。このため、ラジオ放送により、特定のハワイ語が取り上げられることで、ハワイ語のバリエーションが減じたかどうかという問いは、少なくとも現時点では検証が困難である。

米本土生まれ (3.1%) の内訳はカリフォルニア、ミネソタ、ニュージャージー、ワシントン (シアトル) である。その他 (1.9%) に含まれるのはタヒチ、ニュージーランド、スイス (チューリヒ) である。米本土生まれとその他に分類される人物の多くは、ハワイ大学などでハワイ語を学んだ第二言語話者と考えられる。

一方、出生地が不明のゲストも少なくない

(18.2%, 全76件)。ここにはグループ名で記載されているため不明と分類したもの (10件) を含む。

上記の表は全体像を把握するためのあくまで目安であり、いくつか留意点がある。まず、ゲストとして複数回出演した人物がいる。キムラ自身がゲストとなり、他の人物がインタビューを務める回が6回あり、キムラはハワイ島出身である。出演回数が突出 (ゲスト欄の最上位に名前が掲載しているのは、ピラ・ウィルソンとジョセフ・マカアイである。キムラと同様に、番組制作スタッフとして参加していたウィルソンは最多の30回出演しているが、彼はオアフ島出身である。番組パーソナリティのキムラの親類として頻繁に登場する人物マカアイはゲスト中2番目に多い28回で、

ハワイ島生まれである。複数回出演している人物は、ゲストというより、「常連」として番組に貢献しているというほうが実情に近い。また、ウィルソンと同様、番組制作スタッフとして貢献していたスネイケンバーグ (10回)、80年代になって出演することが多くなったノエアウ・ウォーナー (8回) はともにオアフ島出身である。結果的に、ハワイ島とオアフ島生まれの値がより大きくなったと考えられる。ハワイ島とオアフ島以外では、ルーシー・ミカソベがモロカイ島出身 (9回)、レイチェル・ナーハレエルア・マファイキがカウアイ島出身 (8回) となっている。

複数回出演者の中でも、以上のように最も頻繁にゲスト出演した人物たち (上位6名) の合計を示すと、オアフ島出身者3名 (ウィルソン、スネイケンバーグ、ウォーナー) で全オアフ島出身者の38.4% (48/125回)、ハワイ島出身者1名 (マカアイ) で全ハワイ島出身者の26.9% (28/104回)、モロカイ島出身者1名 (ミカソベ) で全モロカイ島出身者の60% (9/15回)、カウアイ島出身者1名 (マファイキ) で全カウアイ島出身者の36.3% (8/22回) となっている。

上記の出演回数はゲスト欄の最上位であった回数であるので、それより下に名前記載がある回もあり、合計すると出演回数はより多くなる。ゲストが複数いる放送回では、ゲスト一覧の一番目に記載されている人物以外にもゲストがいて、リスナーが電話をかけてくる回もある。続いて、同様の基準でデータを整理し、ゲストが言語的影響を受けた場所を示す。

4.3. 言語的影響を受けた場所

要約集では出生地と言語的影響を受けた場所を区別し、別々の項目としている。たとえば、カウアイ島生まれで、オアフ島育ちという人物がいる。

出生地と言語的影響を受けた場所が別項目とされたのは、ハワイ先住民にはハーナイという慣習があるからだと考えられる。ハーナイとは一種の養子制度であり、生まれて間もない子どもが (祖父母など親類やそうではない) 育ての親に引き取られ、数年をともに過ごすことになる。ハーナイはハワイ語の世代を越えた継承を実現する一要因だった。こうした慣習以外でも、通学などで別の島に移住した場合があったようである。

表 3. ゲストが言語的影響を受けた場所

影響を受けた場所	放送回数	%
ニイハウ島	12	2.9
カウアイ島	21	5.0
オアフ島	124	29.7
マウイ島	44	10.6
ラナイ島	2	0.5
モロカイ島	18	4.3
カホオラヴェ島	0	0.0
ハワイ島	120	28.8
不明	65	15.6
アメリカ本土	1	0.2
その他	10	2.4

出身地と同様、オアフ島 (29.7%) とハワイ島 (28.8%) が突出していて、マウイ島 (10.6%)、カウアイ島 (5.0%)、モロカイ島 (4.3%)、ニイハウ島 (2.9%)、ラナイ島 (0.5%) と続き、カホオラヴェ島はなし (0%) となっている。不明も相当数あるが (15.6%)、出生地が不明という人数よりは少なくなっている。

アメリカ本土は出生地に比べて少なくなっている (0.2%)。これはアメリカ本土出身の人々がハワイ大学等でハワイ語を学んだことを示している。こうした人々はその他 (2.4%) に含まれている。

その他については、ハワイ出身であっても、言語的影響を受けた場所として、カメハメハスクールやハワイ大学など教育機関が挙げられている場合がある。ただ、第二言語話者であっても、島を挙げている場合と教育機関を挙げている場合があり、統一されているとはいえない側面もある。言語的影響を受けた場所についてどのように回答するかは、話者のアイデンティティを反映しているといえるだろう。つまり、教育機関を挙げると、学校で学んだ自分自身と日常場面でハワイ語を習得したネイティブスピーカーを明確に区別することになるので、多くの場合年配者であるネイティブスピーカーに対して敬意を払っているといえるのかもしれない。

全体的にみると、出生地と言語的影響を受けた場所でそれほど割合に差がない。ハワイ島は出生地の統計と比べて 20 回分増えているが、これは出

生地が不明だった人物の多くがハワイ島育ちだったからと考えられる。続いて、ゲストがネイティブスピーカーかどうかに関するデータを示す。

4.4. ネイティブスピーカー

要約集にはネイティブスピーカーか (Yes)、そうでないか (No) という項目が設けられている。本節では、第一言語話者 (L1) と第二言語話者 (L2) と言い換え、それぞれの割合を示す。

表 4. ネイティブスピーカー

分類	放送回数	%
L1	261	62.6
L2	98	23.5
不明	58	13.9

ゲストの多くが第一言語話者 (62.6%) で、第二言語話者 (23.5%)、不明 (13.9%) と続く。第一言語話者は年配の話者や (1984 年以降にプーナレオで没入教育を受けた) 若い話者が含まれる。一方、第二言語話者はキムラの他、番組制作に携わっていた当時、大学生くらいの若い話者が含まれる。不明とした分については、グループ出演のため不明とした場合を除けば、一部のテープを聴く限り、不明となっている分の多くも第一言語話者である可能性が高いと推測される。

しかし、第一言語話者かどうかという分類は一筋縄でいかない問題を含む。たとえば、キムラは放送回によって、第一言語話者と分類されている場合とそうでない場合が混在している。キムラがゲスト出演している放送回を聴くと、近親者のハワイ語を聞いて育ったが、本格的にハワイ語を学んで話すようになったのは学校に通ってからと述べている。キムラのハワイ語は番組に出演する年配の第一言語話者から賞賛される水準であるが、当時 20 代で若い話者であったキムラ自身が年配の話者と自分自身のネイティブスピーカー性を区別していて、そのことが分類に反映された可能性がある。次節ではゲストの性別を示す。

4.5. 性別

女性と男性のゲストはおおよそ半々で、どちらかに大きく偏ってはいないことがわかる。

表 5. ゲストの性別

性別	放送回数	%
女性	190	45.6
男性	181	43.4
不明	46	11.0

ゲストとして主に年配の話者が招かれたことを踏まえ、男性よりも女性の話者の方が多くなるのではないかと予想していたが、実際の比率はそれほど差がなく、女性（45.6%）、男性（43.4%）という結果であった。ゲスト欄にグループ名で表記されている回とファイルがない回については不明（11%）とした。

ただ、番組制作に携わり、ゲスト出演もする人々の多くが男性の第二言語話者であったことを考慮する必要がある。前節で示した第一言語話者かどうかという分類を考慮すれば、男性よりも女性のゲストの割合がより高くなるだろう。

5. 議論

番組の全体像を把握する上で、無視できないのが複数回出演者の存在である。今回分析対象としている全 417 回の放送におけるゲストののべ人数は 417 人ということになるが、この内、要約集にゲスト名の記載があるのは 390 回（93.5%）で要約集に記録なしのためゲストが不明なのは 27 回（6.4%）である。

5.1. 複数回出演者

ゲストが判明している 390 回中、ゲスト一覧の最上位に名前がある複数回出演者からグループとして出演した 2 グループを除くと、複数回出演ゲストの実数は 55 名となる。この 55 名の出演回数の合計は 254 回である。換言すれば、55 名（のべ 390 名の 14.1%）で、254 回放送（390 回の 65.1%）したことになるのであるから、カ・レオ・ハワイは半分以上が複数回出演者の貢献によるものである。4.2 節で言及した複数回出演者の上位 6 名の中でも突出していたのが、ピラ・ウィルソン（30 回）とジョセフ・マカアイ（28 回）であった。

後者のマカアイは、キムラの親類であり、年配のハワイ語話者として、番組に登場した。ゲスト一覧の最上位に名前が掲載されていない場合でも、番組の「常連」(regulars) のひとりとして、多くの

放送回に居合わせたのである。

一方、ウィルソンは番組制作に携わるフィ・アロハ・アイナ・トゥアヒネの中心人物のひとりとして、ゲスト出演することもあれば、キムラに代わりパーソナリティを務めることをあつた。さらに、ゲスト欄の最上位に名前がないとしても、制作スタッフとしてほとんどの場に居合わせたと考えられる。ウィルソンはオアフ島出身となっているが、第二言語話者に分類されている。ウィルソンと同様、第二言語話者として番組制作に携わった人物たちにスネイケンバーグやウォーナー（ゲストとしてはそれぞれ 10 回と 8 回出演）などがある。彼らはいずれも若い話者として、番組運営を通し、ハワイ語の再活性化に貢献した。他にも 2～6 回出演した第二言語話者が 7 名、ポリネシア諸語の第一言語話者（タヒチ語とマオリ語）と考えられる人物が 3 名いる。こうした第二言語話者の複数回出演者 13 名（のべ 390 名の 3.3%）で、78 回放送（のべ 390 回の 20%）したことになる。一方、マカアイのような第一言語話者の複数回出演者は 42 名（のべ 390 名の 10.7%）で、163 回放送（のべ 390 回の 41.7%）している。換言すれば、第二言語話者による番組への貢献度は（ゲストが判明している）放送回の 2 割を占め、ハワイ語を再活性化する上で、第二言語話者と分類される人々が大きな役割を果たしていたことが確認できる。しかし、第二言語話者がかかわったから、ハワイ語の記録が不完全だということはできない。むしろ、こうした話者たちが参加したからこそ、年配の話者たちをより効果的に巻き込んでいくことができたのだと推察される。

5.2. 番組の流れ

ここまで要約集の内容を整理することが中心であったが、要約集では会話の話題が部分的に列挙されているだけなので、最後に、実際の録音を聴いた上で把握できる番組の流れについて述べておきたい。

典型的な構成では、まず番組のジングルが流れ、キムラによるイントロダクションがある。続いて、キムラがゲストを紹介する。その後、ゲストに対して、生まれた年、出生地、両親の名前などについて質問をする。こうしたやりとりは文化的知識の記録・記述を目的として、毎回行われるお決まりのやりとりであり、キムラは年配者であるゲスト

トから話を引き出す役回りを担っている。

番組が中盤に入ると、収録スタジオに設置されている電話の番号がリスナーに向けてアナウンスされる。リスナーから電話がかかってくると、キムラはゲストとの会話を一旦中断して電話に応答する。リスナーはキムラと話したり、ゲストに電話を代わってもらったりして、さらに会話を継続することになる。

また、番組ではゲストによるハワイ語の詠唱やハワイアン音楽の演奏実演が行われることがある。演奏は会話の合間に行われる場合もあれば、演奏が放送時間のほとんどを占める場合もある。なお、少し性質の異なる放送回としては、先住民問題事務局 OHA の候補者による政見放送が行われた回がある。

番組における使用言語はほぼすべてハワイ語であり、例外としては、番組スポンサーの英語コマーシャルと、番組中に出演者たちが時折、ハワイ語と英語の間で言語の切り替えを行う点を指摘できる。番組はハワイ語の再活性化を目的としており、使用言語が主にハワイ語となっていることは当然の帰結である。

なお、カ・レオ・ハワイにおける相互行為の詳細な分析としては著者による研究プロジェクトが進められている。マイノリティ言語の研究では政策面に関心が寄せられることが多く、言語実践の記述が軽視される傾向にある。実際の言語使用場面に基づく知見を提示していくことで、言語再活性化の試みに対してこれまで以上に貢献していくことができるだろう。

6. 結論

本稿はハワイ語ラジオ番組カ・レオ・ハワイの全体像を提示することを目指した。2節ではマイノリティ言語とメディアをめぐる研究、ハワイ語とメディアをめぐる研究の現況をまとめた。続いて、3節では研究方法について述べ、4節では要約集のデータをもとに作成した表を示した。具体的には、(1)年別の放送回数の推移、(2)主たるゲストの出生地、(3)言語的影響を受けた場所、(4)第一言語話者かそうでないかの分類、(5)性別に関するデータを示した。5節では特に複数回出演者の存在と意義について議論するとともに、番組の録音を聴いた観察メモに基づき、要約集からだけではわからない番組の典型的な流れについて説明した。最後に、

実際の放送における会話の抜粋を用いて、マスメディアにおけるマイノリティ言語の実践研究を行う必要性を指摘した。

改めてカ・レオ・ハワイはどのような番組であったのかという問いに戻ると、この番組はハワイ諸島出身の話者（特にオアフ島とハワイ島）をゲストに迎えて、毎年20～30回程度放送された。

カ・レオ・ハワイは、ハワイ先住民の言語文化の記録を通じてコミュニティの形成と維持を行うメディア実践であったと結論づけられる。さらに、放送終了後は膨大な録音がデジタル化され、教育機関における電子メディア実践を通じて、現在でも引き続き言語の再活性化に貢献している。カ・レオ・ハワイの録音が再活性化運動において極めて貴重なのは、ハワイ語には組織的に収集され、これほどまとまった量の自然発話による音声資料がほとんど存在しないからである。また、年配の第一言語話者はさらなる高齢化が進み、現在の話者数はおそらく100人を切っていて、新たに音声資料を生み出すことも容易ではない。番組の録音は約500時間分しかないけれども、500時間分もあるのであり、500時間分もあるけれども、やはり500時間分しかないのである。

カ・レオ・ハワイの要約集に所収されているのは417回目までの放送であり、本稿ではこれらを分析対象とした。しかし、番組は本稿が分析対象とした期間以降も数年間続き、キムラが主たるパーソナリティから退いて新たに数人がパーソナリティを務めていた。詳細については今後の調査課題としたい。

付記

本研究は共同研究（平成26年度 大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト K2617「アジア・太平洋地域における言語文化の総合的研究」）の一環として行われたものであり、著者によるカ・レオ・ハワイにおける相互行為を分析する研究プロジェクトを補完する。

引用文献

- [1]Amery, Rob. Phoenix or relic? : Documentation of languages with revitalization in mind. Language Documentation & Conservation. 2009, 3(2), pp. 138-148.
- [2]原知章. “再帰的な人類学的実践としてのメディア

ア研究”. 飯田卓ほか. (編). 電子メディアを飼いならず: 異文化を橋渡すフィールド研究の視座. せりか書房, 2005, pp. 254-277.

[3]原知章. “ハワイのオキナワン・コミュニティと電子メディア”. 飯田卓ほか. (編). 電子メディアを飼いならず: 異文化を橋渡すフィールド研究の視座. せりか書房, 2005, pp. 164-180.

[4]塚原信行ほか. <序論>ネット時代のことばと社会. ことばと社会. 2013, 15, pp. 4-11.

[5]杉田優子. 複合メディア化するローカルラジオと奄美・琉球諸島の危機言語. ことばと社会. 2013, 15, pp. 41-62.

[6]ダニエル・ネトルほか. 島村宣男. (訳). 消えゆく言語たち: 失われることば, 失われる世界. 新曜社, 2001.

[7]松原好次. (2002). ハワイ語の衰退と復権. ことばと社会. 2002, 6, pp. 170-187.

[8]松原好次. (編). 消滅の危機にあるハワイ語の復権をめざして: 先住民による言語と文化の再活性化運動. 明石書店, 2010.

[9]Furukawa, Toshiaki. “‘Solid-laulau-poi-and-fish media’: The use of media for Hawaiian language revitalization”. 松原好次. (編). ハワイにおける先住民言語再活性化運動の成果と今後の課題 平成 17-19 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究課題番号 17520288, 2008, pp. 40-57.

[10]古川敏明. “ハワイ語再活性化におけるメディアの役割”. 松原好次. (編). 消滅の危機にあるハワイ語の復権をめざして: 先住民による言語と文化の再活性化運動. 明石書店, 2010, pp. 207-221.

[11]Hale Kuamo‘o. Ka Leo Hawai‘i 1972–1989, Tape # HV24.1–HV24.200. Hale Kuamo‘o, 1996.

[12]Hale Kuamo‘o. Ka Leo Hawai‘i 1972–1989, Tape # HV24.201–HV24.417. Hale Kuamo‘o, 1996.

Abstract

This study analyzes a Hawaiian language radio program, *Ka Leo Hawai‘i*, broadcast in Honolulu, Hawai‘i. Based on a collection of recordings of over four hundred shows from the 1970s and 1980s, it attempts to describe what the program was like at that period. The program can be described as a media practice that formed and maintained a community through documenting the language and culture of Native Hawaiians. A central feature of the show was invited guests, many of whom were elders and native speakers of Hawaiian. After the program ended, the audio recordings were digitized, and they have been used for educational purposes and have continued to make a contribution to the revitalization of the Hawaiian language. These recordings are truly important because Hawaiian has almost no collections of audio recordings as large in volume and that were collected as systematically as *Ka Leo Hawai‘i*. It is also not easy to generate new audio recordings of elderly native speakers because their number is now presumably under one hundred.

(受付日: 2015年3月21日, 受理日: 2015年4月16日)

古川 敏明 (ふるかわ としあき)

現職: 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科 講師

ハワイ大学マノア校言語学研究科博士課程修了. Ph.D. (Linguistics).

専門は社会言語学, ディスコース分析.

主な著書: ハワイを知るための 60 章 (分担執筆, 明石書店)